

バイプレイヤー像にみるダンディズム美学の変奏

——『眠狂四郎無頼控』の住職空然と

常磐津師匠文字若の人物造型をめぐって——

山口 和彦

キーワード：バイプレイヤー、無欲恬淡、意気地の自由、精神の美学

I はじめに

「映画・演劇などで、主人公の役」¹を意味する主役（leading actor）に対して、バイプレイヤー（by-player）は「助演者。脇役」²の意味で用いられる和製語であるが、小説・戯曲などの文芸においても、主役を引き立て、副次的な役割を担うバイプレイヤーの存在は欠かせない。柴田錬三郎の代表作として知られる眠狂四郎シリーズも、このような意味でのバイプレイヤーが独特の存在感を示す作品群と位置づけることができる。

さて、眠狂四郎シリーズの第1弾「眠狂四郎無頼控」は、昭和31年5月から雑誌『週刊新潮』に連載された。当初は20話程度の構想であったともいわれるが、読者の好評に応じて100話の連載となり、昭和34年1月からは「眠狂四郎無頼控 続三十話」が追加連載されて、最終的には正・続130話の長篇となった。³ 十一代将軍徳川家齊

治下の江戸後期、老中筆頭水野出羽守忠成^{ただあきら}と幕政改革の気概に燃える若き西丸老中水野忠邦との権勢争いを背景に、稀世の剣の達人眠狂四郎の活躍を描いた伝奇剣豪小説である。正篇100話に通底するのは、忠成の寵臣土方縫殿助、豪商備前屋、公儀隠密“親不知組”などの敵対勢力と、忠邦の側頭役武部仙十郎につながる眠狂四郎との対決の構図であるが、このライトモチーフに、忠邦邸へ女中として送り込まれた敵方の女密偵美保代と眠狂四郎との愛の行方が副筋として織り合わされていく。そして数奇な運命をたどるふたりの人生に個性的なバイプレイヤーたちが彩りを添え、作者一流の虚実一体となった時代絵巻がくり広げられるのである。

「処女作の中にすべての萌芽が胚胎する」⁴と「ユリイカ」に記したのはエドガー・アラン・ポーであるが、このポーのことばにならっていえば、シリーズ第1作の『眠狂四郎無頼控』には、以降の作品にも引き継がれる趣向や特徴——周到に計算されたプロット、妖艶なエロティシズム、しっとりとした江戸情緒、四季折々の美しい自然描写、独特のリズムをそなえた格調高い文体、等——をすでにみとめることができる。

なかでも江湖の好評を博した要因のひとつが、主人公とバイプレーヤーたちの人物造型の妙である。『ハムレット』や『モンテ・クリスト伯』など古今の名作が読みつがれる理由のひとつに、柴田は「主人公の性格と境遇の魅力」⁵を挙げているが、彼が世に送り出した主人公は、まさに特異な境遇に生まれた特異な個性の持ち主である。眠狂四郎がその瘦躯異相に深い寂寥を滲ませるのは理由のないことではない。幕吏に捕えられて拷問を受け、踏み絵によって転び伴天連となったオランダ人医師ジュアン・ヘルナンドが、捕縛を指揮した大目付松平主水正への意趣返しに、その息女を犯した結果この世に生を享けるという忌まわしい宿運を、狂四郎は背負っているのである。

しかしシリーズの人気を支えるのは、単孤無頼の主人公の魅力だけではない。眠狂四郎をとり巻く脇役・助演者たちの個性や人間味も、物語に欠かせない魅力の源泉となっている。文芸評論家たちが夙に指摘するように、主人公の精神像には近代的なダンディズムの影響が色濃い⁶が、身分や経歴を異にするバイプレーヤーの人物像にも程度の差こそあれダンディズム美学の投影を見ることができる。ここにいうダンディズムとは、たんに服装や身ごなしの洗練のみを意味するものではない。柴田のことは借るなら、「他人に似ることを厳しく警戒する独創性の追求によって、真価を発揮する」心的スタイルであり、精神の貴族主義とも呼ぶことのできる近代的存在方式⁷の謂である。小論は、『眠狂四郎無頼控』に登場する多くのバイプレーヤーのうち、主人公と近いふたりの助演者に焦点をあて、眠狂四郎のダンディズムとも響き合う彼らの身上や生きざまを考察することを目的とするものである。

II 龍勝寺住職空然、その無欲恬淡の生きざま

『眠狂四郎無頼控』のバイプレーヤー陣には、主人公の一の子分を自認する巾着切の金八や、読本作者で講釈師の立川談亭といった馴染みの脇役に加えて、特定の物語にのみ姿をみせる面々もおり、前者を仮に定連の脇役と呼ぶとすれば、後者はさしずめ一見や端役といったところであろう。主だった脇役については、拙論「眠狂四郎シリーズの名脇役たち」⁸で考察を試みたが、彼ら以外のバイプレーヤーたちと主人公やその妻となる美保代とのあいだにも、さまざまな出会いと別れがあり、それらを通じてバイプレーヤー自身の個性や身上も巧みに表現される趣向になっている。

むろん、定連とまではいえない脇役や助演者でも、その経歴や性格に応じて人物像は丁寧に造り込まれている。⁹ 眠狂四郎作品には、堅気の脇役のほかに人生の裏街道を歩く日陰者や浮世の余計者も少なからず登場するが、後述する常磐津師匠文字若や金八とかつて稼業仲間であった小春吉五郎¹⁰も、そうしたはぐれ者のひとりである。「頬の殺げた、色艶のわるい、目つきの鋭い」¹¹ 吉五郎は、大目付松平主水正の若党として十余年間忠義一筋に仕えながら、主水正がお役御免になったのを境に道を踏み外し、主人公と敵対する備前屋にも雇われた過去をもつが、狂四郎の「小気味のいい、胸のすくような生きかた」¹²に惚れて、これまで「幾度か生命がけの働き」(57)を狂四郎のためにしてきた男である。

このように個性的な顔ぶれが揃う助演者たちのなかでも、独特の存在感を発揮する

のが、押上村にある古寺龍勝寺の住職空然である。狂四郎よりも年長の空然は、忠邦の側頭役武部仙十郎や岡っ引の佐兵衛らとともに主人公を補佐し、時に後見的役割をつとめるが、狂四郎との出会いは第5話「毒と柔肌」に記されている。どこかの軒下で驟雨を避けた狂四郎が「濡れ葉をきらきらと輝かせている竹藪のそばを通って」、龍勝寺の「門内に入ると、住職の空然が、甃石に彳んで、月を仰いでいた。飄々とした人柄で、檀家もない貧乏寺を、托鉢で持ちこたえることに、至極満足しているらしぶりだった。互いに素性もろくに知らぬ間柄なのに、狂四郎が居候を願い出ると、こころよく、庫裡つづきの離れを空けてくれたのである。」¹³

柴田の時代小説には、武門の出でありながら仏道に帰依した人物がしばしば登場するが、空然もそうした元武士のひとりである。金八や談亭などの定連に比べると、登場機会は格段に少なく、物語の展開を左右する働きをするわけでもないが、それでも空然はただの端役的バイプレーヤーではない。ともに過ごす時間は限られていても、ふしぎと忘れがたい印象をのこす人物がいるように、空然は狂四郎にとってかけがえのない知己であり、人柄を含めた存在そのものが懐かしさと親しみを感じさせる相手なのである。いや、馴れ合いとは無縁のほどよい距離感を保つ者同士だからこそ、かえって親近感と懐かしさを覚えさせてくれる関係¹⁴といえよであろうか。

空然の質素な暮らしぶりは、第7話「修羅の道」の次のような叙述にもその一端を垣間見ることができる。晩夏から秋にかけて鳴く虫の採集や提灯の絵柄描きの内職に、空然がいそしむ様子を写した一節である。「かまびすしい蟬の声と、炒りつける炎熱の陽光を、坊主頭にあび乍ら、むっとする草いきれの中に、身を踞めて」¹⁵空然が虫を採っていると、「日本橋から、提灯屋さんが見えておいでです」と、静香が知らせにくる。狂四郎を慕いつつ、美保代と同じく哀しい運命をたどるこの幸うすい娘は狂四郎の従妹にあたり、秘かに耶蘇教を信仰しているのであるが、毒気に冒された身を一時龍勝寺に寄せているのである。空然が片手に提げた竹籠に目をとめて、「なんですか?」と静香が訊くと、「きりぎりすですよ。これも、かせぎのうち——」と空然は笑ってみせた。「江戸の虫売が、朝早く、このあたりに、鈴虫や響虫や蟋蟀や螢などを仕入れに来る」(166)ので、暑いのを我慢して虫を捕えていたのである。

盆をひかえて、この飄々たる托鉢雲水は、急に、せつせと内職をはじめたのである。提灯問屋から鬚骨提灯を山のように運ばせて、その瓜形、丸形、瓢箪形に応じて、巧みな紅色・藍色の花鳥風月を描くのもそのひとつだった。白張に立花を図し、鬚題目を描いたのは法華宗向き、散り蓮華を描いたのは諸宗向き——といったあんばいに、空然の余技は鮮やかであった。

当時の風俗として、どんな貧しいその日ぐらしの裏長屋でも、必ず盆提灯をともしたのである。また、鳴き虫を飼って置いて、迎え火の晩に放つのも、佳い習慣であった。

空然は、こうした内職かせぎをして、盆になると、村中の子供たちに、各種の花火をくれてやるのを、愉しみにしていた。また子供たちも、その期待で胸をふらませていたのである。(166-167)

自然の風物や市井の世態人情を描いて、そこに脇役の人柄や個性をさりげなく写し出すのが小説家柴田の手腕のひとつであるとすれば、夏の風物詩ともいえる虫採りや盆提灯の絵柄描きに空然が精を出すさまを写した上の描写は、江戸の庶民生活の一コマを切り取りつつ、空然の人となりを巧みに表現している。空然の経歴は作中で詳しく語られることはないが、過去に大きな不幸を経験したであろうことをうかがわせることによって、人物像にふくらみと奥行きを持たせる手法が採られている。寺の宗派を静香に問われ、「わたし自身、俄か坊主で、まだ何宗ともきめていないのですよ。わたしが尊敬しているのは、白隠ですから、禅宗にしておきますかな」(167)と、空然が答えたあと、ふたりのあいだで次のようなやりとりが交される。

「では空然さんは、もともと坊さんではないのですか？」

「微禄のさむらいだったのです。窮屈なさむらいのくらしがイヤになって、閑雲野鶴、何れの天か飛ばざらん、という了簡になったのです。」

「ずいぶん、勇気がおありだったのですね。」

「人間は、なにか大きな不幸に襲われると、勇気が出るものです。……白隠禅師だって、もともと偉い人じゃなかった。若い頃は、坊主の生活に大きな疑いを抱いて、苦しみ悩んで居りますよ。やっどこさ、仏道を悟りかけて研鑽精進したところが、むくいられたものは、大喀血だったのです。その時の苦しみを……普く智識を訪ねて救いを求めんとすれど、病床は片時も離るべからず、仏神に祈念すれども靈驗なく、兎やせん角やせんと心を尽せども、何ひとつ能わず、と記して居ります。それで、とうとう、ヤケを起してふらふらとあてどない行脚に出てしまったのです。死神野郎、殺すなら殺してみやがれ、というわけでした。その気力で、とうとう病気が治って、八十四まで生きのびてしまった。」

「空然さんも、白隠禅師のように生きたいのですね。」

「真似て真似られるものではありませんまいがね。」

とこたえて笑う空然の表情は、茫洋として、とらえどころがなかった。

——この人は、きっと、わたくしなどの想像もつかぬような、大変な不幸にお遭いになったのだ。

そう考え乍ら、静香は、わが身の境遇と信仰を、そっとひきくらべてみた。¹⁶

常人には想像しがたい辛酸を舐めたであろう過去を背負いながら、飄々と生きるこの禅僧のすがたに、ダンディズムの一類型としての精神のかたちを認めるといえば奇異に思う人がいるかもしれない。ダンディズムに特徴的な精神の構えは、世俗と対峙するためにダンディが身におびた、いわば知性の鎧であるが、飄々乎たる空然の自然体は、ダンディの意志的な仮面演技とは異質のものと映るからである。しかしダンディズムが精神の貴族主義という「反俗物主義」¹⁷の性格を持つかぎり、その対極に位する無我の境地にもダンディズムの逆ヴァリエーションとしての心性が重なり合う。

両者は畢竟、いさぎよさという精神の様態を共有しているのである。

托鉢で寺を支えつつ、内職の稼ぎで子供たちに花火を買い与える空然の無欲さといい、子供たちとの無邪気な交友といい、そこには「村童を友とする脱俗生活を送」¹⁸ った良寛の生き方をどこか想わせるところがある。いやむしろ、人間の欲望や煩悩のすさまじさを知悉するからこそ、無私・無心の生を空然は選びとったというべきかもしれない。ともあれ、清貧に安んずる空然の無一物の生き方には、精神の貴族としての矜持を固守しようとするダンディの心性に通じるものがあり、その生のスタイルはダンディズムの変型としての無欲恬淡の美学とも称しうるものなのである。その美学の根柢に、利欲とは無縁の清廉さ、光風霽月の心懐がみとめられることはいうまでもない。

III 常磐津師匠文字若、その辰巳女の心意気

龍勝寺住職の空然が塵界に名利を求めず、行雲流水の日々を送る雲水であるとすれば、深川生まれの文字若は金八や立川談亭らとともに八百八町の義理人情のしがらみに生きる鉄火な常磐津師匠である。金八から姐御と呼ばれることからわかるように、文字若はもと凄腕の掬摸で、“素通りお仙”の異名をとっていたが、いまは足を洗って堅気に暮らしている。江戸っ子文字若が初めて登場するのは第3話「隠密の果て」で、物語は次のような一節から始まる。

天下の御膝元・花の大江戸——野暮と化物は、箱根より東に住まぬ、と称して、江戸っ子が、意気たり通たり粋たることを最大の誇りとした時代であった。

横町新道に曲れば、どこからでも、三味線の音がきこえて来ていた。

深川の、仙台堀に添うた今川町の、とある横町からも、朝から、陽気な唄声がひびいていた。看板には「常磐津文字若」とあった。三十過ぎた年増であったが、小股の切れあがった佳い女で、半年ばかり前に引越して来たのだが、いまでは、ここが、町内の若い衆の寄合所の観を呈していた。¹⁹

作中での文字若の主な役回りは、主人公とその妻美保代を陰で支えることであるが、物語の人物相関図の中でみると、弟分の金八や談亭を通じて狂四郎とは懇意である一方で、狂四郎の敵対勢力側に、文字若にとって因縁浅からぬ関係の相手がいた。公儀隠密“親不知組”随一の剣の使い手で、狂四郎の宿命の敵となる白鳥主膳である。「氷のように冷酷な、浪漫派のこの剣客」²⁰ は、狂四郎とは別の意味でダンディズムを体現するのであるが、この白哲の貴公子とのあいだに人には明かせぬ苦い思い出が文字若にはあった——「白鳥主膳に対する怨みは、文字通り、一生消えやらぬ傷痕となって、からだの中にのこっているのであった。」²¹

5年前、江戸でも選りすぐりの掬摸の腕利きを揃えた“黒元結連”に文字若が加わった頃、四天王のひとりであった五郎次が、懐を狙ったさむらいに斬られる事件が起

きた。斬ったさむらいが主膳であった。後日、文字若が鬼子母神前の往還で手頃の“客”を物色していたとき、偶然そのさむらいが文字若の前を通りかかった。「よし、あたしが仇をうってやる」(42)と、文字若は連れの制止を振りきって主膳の跡をつけ、とある辻で追いつくと、右手に隠した鋭利な鋏で紐を切り、すばやく印籠を握った——と思った刹那、手首をむずと掴まれていた。しかも主膳は依然として目を前方へ向けたまま歩調も変えてはいなかった。傍目には、むつましげに、ぴったり寄り添って歩く好い仲の二人と映ったであろう。「どうするのさ！」と、ふて腐れた文字若が小声で突っかかると、「さあ、どうしようかな——」(43)と、主膳は頭巾の中で柔和に笑うだけであった。そして、さる料亭へ文字若は連れ込まれ、有無をいわず押えつけられたのである。

素通りお仙ともあろう女が、あっけなく屈服したのも、対手が頭巾をとりはらったとたん、その容貌のあまりの妖しい美しさに、思わずはっと息をのんで、抵抗する力を抜いたためであった。その隙に、男の片手は、残忍に、下着に包んだものを抜いていたのである。

——勝手にしやがれ。

と、目蓋をとじて、顔をそむけた——そのあきらめの中に、あまりの美貌に魅せられた浮気の虫が動いたのを、のちになって、文字若は、どんなにくやしがったことだろう。

誰にも信じられぬことだったが、文字若は、その日まで、からだは生娘だったのである。それを契機として、からだもまた、その日その日の風まかせに、男から男へ移して行ったのであった。(43-44)

これが文字若の、主膳とのくされ縁の始まりであった。『眠狂四郎無頼控』を貫くのは、先述のとおり本丸老中の寵臣土方縫殿助、備前屋、白鳥主膳を擁する“親不知組”らの敵対勢力と眠狂四郎との対決の図式であるが、この主筋に副筋として狂四郎と美保代の愛の行方が織り合わされ、そこに狂四郎と主膳との宿敵関係、文字若と主膳との因縁、そして狂四郎に対する文字若の秘かな恋情などが絡まり合って、さまざまなかたちの愛と人間模様が交錯する時代絵巻が展開していく。しかもそれら脇筋の交え方も手が込んでいて、たとえば文字若と主膳との関係にしても、主膳が敬慕するのは桂川明子内親王という皇女であり、その主膳に私怨を抱きつつも、くされ縁を完全に断ち切れない文字若の悲しい女の性^{さが}も描かれるという具合に、愛憎相半ばする情愛の機微や人間の業が濃やかに描き分けられ、物語に真実味を持たせる効果をあげている。

狂四郎への叶わぬ思慕を胸に秘め、美保代と狂四郎の幸福を願う文字若の切ない女心は、たとえば次のような一節からもうかがうことができる。「——美保代さまも、とうとう、想いが叶って、幸せにおなりになった」²²と、文字若がぼつねんと物思いにふけている場面である。

みぞおち
鳩尾のあたりに、微かな疼きがある。

——いちばん、ばかなのは、あたしさ。

そっと、じぶんに呟いている。美保代を狂四郎に添わせたい、と念じた気持ちに、いつわりはない。ほんとうに、心からそうねがって、まわりの人々にも云ったし、神棚に両手をあわせて祈っても来た。

「先生に惚れているね、姐御——」

立川談亭から、いつか、そう云われた時も、平気で、

「ああ、惚れているよ。先生のようなおひとに惚れるなっていう方がむりじゃないか——。なにを考えておいでなんだか……生きているのがなんにも面白くないような……とらまえ様のない、暗いあのお顔を眺めていると、あたしのような莫連は、その刀でいっそひと思いに斬られてしまいたいような気分になっちゃうじゃないか。だから、はやく、美保代さまと一緒にあって、もっと人間くさい、生きているのが愉しいって顔をして頂きたいやね」と、こたえたものだった。

本音であった。これまで出会った男のうちで、狂四郎程、強烈な印象を、文字若の胸中へやきつけた男はいなかった。

(中略)

「先生、たった一度でいいから、私のからだを抱いて下さいな。」

目の冴えた真夜中、じっと闇を覗め乍ら、ひとり、小声で、呟いてみたこともある。(中略) 女であった。思っただけで、口に出せる願いではなかった。それどころか、その人をたすけるために、すすんで、他の男に身をまかせる無謀をやったのけて、その後に来た寂寥感に、なにもかも面倒くさくなって、一月あまりを、蒼い素顔でぼんやりとくらしした文字若であった。(356-357)

文字若は、たしかに物語の前面でめざましい活躍をする人物ではない。「弟分の金八とは、切っても切れない縁があ」²³ るとはいえ、あくまでも黒子に徹するのが文字若の役所である。しかし空然と同じく文字若も、影の薄いただのバイプレーヤーではない。金八の小唄や端唄が沈みがちな物語の雰囲気をつらう一服の清涼剤の趣きを持つように、文字若のつま弾く三味線の音色は江戸情緒を伝えるのに一役買っているし、金八や吉五郎ら昔の稼業仲間との義理を重んじる律儀さも持ち合わせた文字若は、まさに小粒でもぴりりと辛い山椒のように、物語にスパイスを効かせる存在なのである。

そればかりではない。過去に苦い経験をした文字若が哀しい女心をおし隠し、狂四郎と美保代に力添えしていくすがたには、「意地と侠気を売り物にした」²⁴ 辰巳芸者さながらの江戸っ子の心意気を見てとることができる。ダンディズムは一般に男性の生き方を規定する美学と捉えられがちであるが、その心性を広義に解釈すれば、かならずしも男社会にのみ現前するものではない。花柳界や浮き河竹の世界に生きた女性にも見られることを、たとえば九鬼周造の『「いき」の構造』によって知ることができる。

「運命によって『諦め』を得た『媚態』が『意気地』の自由に生きるのが『いき』である」²⁵と「いき」の理念を定義した九鬼にならっていえば、「運命によって『諦め』を得た」辰巳女の文字若が『意気地』の自由に生きる「いきぎよさこそ彼女の身上であり、江戸っ子としてのその心立てを女性版ダンディズムと呼んでもそれほど見当違いな評言とはならないはずである。

IV 結び

巾着切の金八や講釈師の立川談亭らの定連に加えて、個性的なバイプレーヤーたちが『眠狂四郎無頼控』の小説宇宙を彩っていることは、これまで考察してきたとおりである。翳のある異相に深い孤独感を滲ませるニヒルな主人公が逆説的に、いかえれば「マイナス方向から」²⁶人間味を感じさせる造型がなされているように、バイプレーヤーたちもその挫折や負い目の方から人物像を描き出す手法が用いられている。質朴の美風を受け継ぐ住職空然にせよ、「意地と俠気」を身上とする常磐津師匠文字若にせよ、その生きざまが魅力的なのは、過去の苦難や存在の寄る辺なさを抱えて生きるふたりのすがたに、心の陰翳や揺れが透けて見えるからであろう。その愁いや寂寥に人間的な血のぬくもりを感じとれるのである。もちろん彼らのほかにも、狂四郎や美保代を支える助演者は少なからずおり、なかには小春吉五郎のように脛に疵をもつはぐれ者が含まれることも前述したとおりである。

興味深いのは、堅気の脇役のみならず、浮世のはみ出し者や日陰者までもが、主人公の実像を浮かび上がらせる役割を担うことである。いやむしろ善と悪、聖と俗、光と闇などの境界線上で、人間の真実や生の実相を洞察する眼を肥やした者たちだからこそ、眠狂四郎という仮面演技者の内なる真実を喝破しようというべきであろうか。いずれにせよ、多彩な顔ぶれのバイプレーヤーたちが主人公のために、そして薄倅の妻美保代のために、文字通り水火を辞せぬ献身ぶりをみせるところに『眠狂四郎無頼控』の魅力の一端があることは、改めてつけ加えるまでもないであろう。彼らのひたむきな滅私の精神が主人公のダンディズムを際立たせ、同時にバイプレーヤーたちの心意気や生きざまをも写し出す効果をあげているのである。

「首相は空を仰げ」と題するエッセイで、柴田は大衆小説を書きつづける理由のひとつに、“心意気”を持つ人物が描けることを挙げ、「心意気を持たない人物を主人公にした場合、長篇として書く興味がなくなってしまう」と述べている。そして「金が万能である、というおぞましい風潮が（中略）ようやく、その金によって殆ど決定的なダメージをくらう、という皮肉な現象をもたらしているいま、どうやら、『心意気』というものが必要になって来た模様である」²⁷と筆をすすめて、「その『心意気』が、現代ほど皆無な時代はない」²⁸と憂えているのである。ここで柴田のいう“心意気”が実利優先の思想や「ギブ・アンド・テイクの物質欲の料簡」²⁹とは対蹠的な「さっぱりして、いきぎよい気性。また、物事に積極的に立ち向かおうとする、いきぎよい気構え」³⁰を意味していることは明らかであろう。近代的なダンディズムを創作活動の

核に据えた作家が、“心意気”に象徴されるこの精神のいさぎよさを重んじたのは当然であった。功利の原則を金科玉条とする時代の風潮のなかで、ダンディズムの根幹をなす心性のひとつが、ほかならぬ“心意気”だからである。

「首相は空を仰げ」が書かれたのは1970年代のことであるが、柴田が創作活動を通じて、とりわけダンディズムを基底に据えた作品の造型を通じて具現化した精神主義の価値は、“無欲恬淡の美学”にせよ、“意気地の自由”にせよ、およそ半世紀が経過した21世紀の今日においても少しも色褪せてはいない。いやそれどころか、効率主義やコスト・パフォーマンス重視の考え方が一段と幅を利かせる社会に生きる私たちにとって、こうした精神の美学の意味は、いまいちど問い直してみるべきものかもしれない。柴田は「滅びには美学がある」と題した別のエッセイで、精神の美学は「べつに、滅びゆく者だけが、示すのではない」と語り、こう記している。³¹

「美学」というのは、何も、大学の研究室や教室にあるのでもなければ、評論家や作家だけが論じる、形而上のしろものではない。

(中略)

「美学」は、自分自身の人生の中に、常に存在しているのである。³²

『眠狂四郎無頼控』を嚆矢とする眠狂四郎シリーズは、このような精神の美学の意味を、いまなお私たちに問い続けている。

注

¹ 『明鏡国語辞典』の【主役】の定義による。『明鏡国語辞典』、大修館書店、2002年、767頁。

² 『精選日本国語大辞典』の「バイプレーヤー」の定義による。『精選版 日本国語大辞典 第三巻』、小学館、2006年、23頁。

³ 眠狂四郎シリーズは『週刊新潮』連載後に単行本化され、全7作が新潮文庫に収録されている。「眠狂四郎無頼控」100話と「眠狂四郎無頼控 続30話」の計130話は、現在『眠狂四郎無頼控 (一)』～『眠狂四郎無頼控 (六)』の6分冊で刊行されている。

⁴ ポーの「ユリイカ」の一節。エドガー・アラン・ポー著、牧野信一・小川和夫訳「ユリイカ——散文詩」『ポオ 詩と詩論』、東京創元社〈文庫〉、1983年、284頁を参照。なお、翻訳書では引用箇所には傍点が付されているが、便宜上これらの傍点は省略した。

⁵ 柴田錬三郎「眠狂四郎の生誕」『柴田錬三郎選集第十八巻 随筆・エッセイ集』、集英社、1989年、189頁。

⁶ 尾崎秀樹は「柴田錬三郎の文学には、ニヒルな側面をふくめて、近代的なダンディズムがつよく、それが狂四郎の造型にあたってつよく作動しており、既成のものと同線を画す新しみともなっている」と記し、秋山駿は「無頼のダンディになっていく眠狂四郎」という評言を用いている。前者については尾崎秀樹「解説」、柴田錬三郎『眠狂四郎殺法帖』、新潮社〈文庫〉、1975年、350頁を、後者については秋山駿「解説」、柴田錬三郎『剣鬼』、新潮社〈文庫〉、1977年、417頁を参照。また縄田一男は「不滅のヒーロー、眠狂四郎の創造に、そして偽悪家であることに徹し続け

たシバレンにとって、“他人に似ることを厳しく警戒する独創性の追求”は生涯のテーマであったといっている。／彼が残した数々の短篇の中には、そうしたダンディズムの発露や、逆説、或いは対極にある人間の業を描いた作品があり、皆、見事なまでの切れ味を示している」と評している。縄田一男「解説」『柴錬の「大江戸」時代小説短編集 花は桜木』、集英社〈文庫〉、2011年、333-334頁。

⁷ 柴田錬三郎「賭博者はダンディであるべきだ」『眠堂醒話——地べたから物申す』、新潮社、1976年、184頁。

⁸ 拙論「眠狂四郎シリーズの名脇役たち——番外篇「のぞきからくり」の語り手松次郎を中心に」『信州大学総合人間科学研究 第16号』、148-160頁。

⁹ 「私は、連載小説を書くにあたって、主要な登場人物をつくって、その経歴やら性格やらを、きめる。かれらは、物語の中で、その経歴・性格にしたがって行動しはじめる」と、柴田は作中人物の造型について語っている。柴田錬三郎「作家の発想について」『どうでもいい事ばかり』、集英社、1978年、112頁を参照。

¹⁰ 小春吉五郎は『眠狂四郎無頼控』にのみ登場するバイプレイヤーで、第24話「笑う狂女」、第27話「切支丹坂」、第63話「追慕小路」、第66話「必死刀」、第83話「孤影両断」の5話に姿をみせる。

¹¹ 柴田錬三郎「笑う狂女」『眠狂四郎無頼控(二)』、新潮社〈文庫〉、2017年、82頁。

¹² 柴田錬三郎「追慕小路」『眠狂四郎無頼控(四)』、新潮社〈文庫〉、2017年、65頁。これ以降、本文中の引用後の括弧内の数字は、同書同話の頁数を表すものとし、引用文中のルビは原則として省略した。また同話同頁から複数の引用を行う場合は、その頁からの最後の引用の後にのみ頁数を記すこととする。

¹³ 柴田錬三郎「毒と柔肌」『眠狂四郎無頼控(一)』、新潮社〈文庫〉、2010年、120頁。この第5話「毒と柔肌」に初めて登場して以降、空然は第6話「禁苑の怪」、第7話「修羅の道」、第10話「無想正宗」、第47話「悲愁の丘」、第83話「孤影両断」にも登場する。なお、シリーズ第4作『眠狂四郎孤剣五十三次』の第8話「魂棚」、第25話「元日の夜」でも、空然はその独特の個性を発揮している。

¹⁴ 田村正和主演でテレビ放映された時代劇「眠狂四郎 The Final」(フジテレビ、2018年)は『眠狂四郎無頼控』をもとにしているが、筋立ても登場人物も原作とは大きく異なる。空然の人物設定もその一例で、原作では「素性もろくに知らぬ間柄」の空然が、テレビドラマでは狂四郎の育ての親として登場する。しかし空然が狂四郎にとって精神的に近しい存在であることを考えると、この演出もさほど突飛な脚色とはいえないかもしれない。

¹⁵ 柴田錬三郎「修羅の道」『眠狂四郎無頼控(一)』、新潮社〈文庫〉、2010年、165頁。

¹⁶ 同書、167-169頁。日頃の温和な姿とは別人の空然も描かれている——「喝っ！」(中略)「荒れはてたとはいえ、此処は、夢想国師が光輝を浴びる武蔵国五山十刹の一であるぞ！解脱門に通ずる菩提路上にあって、淫虐の振舞いとは何事かっ！すみやかに立去れ、外道め！」／凜々たる姿から、日頃の瓢乎たる風貌は、あとかたもなく消えていた。」同書、「修羅の道」、171-172頁。

¹⁷ 『精選日本国語大辞典』の「ダンディズム」の語釈による。『精選版 日本国語大辞典 第二巻』、小学館、2006年、1379頁。

¹⁸ 『広辞苑』の【良寛】の語釈による。『広辞苑 第七版』、岩波書店、2018年、3092頁を参照。

- ¹⁹ 柴田錬三郎「隠密の果て」『眠狂四郎無頼控(一)』、新潮社〈文庫〉、2010年、56頁。
- ²⁰ 柴田錬三郎「白鳥主膳」『眠狂四郎無頼控(三)』、新潮社〈文庫〉、2012年、341頁。
- ²¹ 柴田錬三郎「紅の花」『眠狂四郎無頼控(三)』、42頁。
- ²² 柴田錬三郎「白鳥主膳」『眠狂四郎無頼控(三)』、355頁。
- ²³ 柴田錬三郎「隠密の果て」『眠狂四郎無頼控(一)』、58-59頁。
- ²⁴ 『精選版日本国語大辞典』の【辰巳芸者】の語釈による。『精選版 日本国語大辞典 第二巻』、小学館、2006年、1304頁。
- ²⁵ 九鬼周造『「いき」の構造 他二篇』、岩波書店〈文庫〉、2022年、107頁。
- ²⁶ 小説家の丸谷才一は「ラスコーリニコフという若者がいかに弱点があるか、マダム・ボヴァリーという女がいかに愚かしい失敗をしたかを書くことによって、ラスコーリニコフやマダム・ボヴァリーがどんなに魅力があるかをはっきりと出す。つまりマイナスの方向からの人間の研究というのが長篇小説の大事なところですね」と語っている。丸谷才一『文学のレッスン』、新潮社、2010年、83頁。また“作中人物の魅力論”については、同書46-51頁も参照。
- ²⁷ 柴田錬三郎「首相は空を上げ」『眠堂醒話——地べたから物申す』、新潮社、1976年、112-113頁。
- ²⁸ 同書、121頁。
- ²⁹ 同書、112頁。
- ³⁰ 『明鏡国語辞典』の【心意気】の定義による。『明鏡国語辞典』、大修館書店、2002年、576頁。
- ³¹ この段落の文章は、全学教育機構ニュースレターに寄稿した拙文の一節をもとにしているが、字句等には部分的に変更を加えた。山口和彦「SGE 随想⑬ 精神の美学について」、『信州大学全学教育機構ニュースレター第13号』、2015年、1頁。
- ³² 柴田錬三郎「滅びには美学がある」『眠堂醒話——地べたから物申す』、新潮社、1976年、76頁。

(信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 教授)
2023年2月10日受理 2023年3月2日採録決定